



TITLE:

# ニホンザルの発達段階(III 共同利用研究 2 研究成果)

AUTHOR(S):

乗越, 皓司

---

CITATION:

乗越, 皓司. ニホンザルの発達段階(III 共同利用研究 2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 75-75

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160430>

RIGHT:

幸島ではこうした地勢が多く、またその割に観察者の行動の自由が保たれるため、この種の研究には有利な条件を備えていた。c) また個体追跡に際して、観察者による投餌は必須条件ではなかった。長年にわたるヒト慣れのためか餌の仲介がなくても相当のところまで追跡でき、またそのことが当面のサルに行動に直接影響を与えということとは希れであった。ただ一定地域に群れをとどめることが望ましい時は、略2時間ごとぐらいに多数個体に投餌すればよい。その量は本調査の場合、1頭1日平均大豆 60~90grであった。d) 以上の諸点から幸島においては、性行動の分析に関しては実験室条件と自然環境下での分析の接点を求めることが可能であるとの結論を得た。e) 最後に本調査の期間、時期であるが、三戸サツエ氏からの情報からも指摘されるごとく、観察されたデータはこの群れの交尾期の終盤に位置しており、おそらく、それは受胎後の交渉であるものと推定される。1969年19例の出産は5月より8月にわたる3か月に集中しており、これに対応する交尾期は前年11月上旬より2月上旬であり12月中旬に中央点が位置する。したがって次回調査時期と期間は、これらの資料を十分考慮して決定される必要がある。

## ニホンザルの発達段階

好 広 真 一 (京大・理・自然人類)

志賀高原一帯に棲息するニホンザル群のうち、①地獄谷において餌付けされているA群について、転出入などオスザルの動きを、オスニホンザルの一生という観点から考察し、②一方、行動の面から発達段階を設定すべく、A群に所属するオス・メスのサルについて4才以下の個体を中心に個体追跡による行動記録を行った。③また野生群におけるニホンザルの発育とオスザルがどのように生きていくかを観察するための基礎作業として、志賀高原一帯に(a)何群がいて、(b)それぞれの個体数はいくらかであり、(c)A群より転出したどのオスザルが所属しているか、の確認を試みた。

結果であるが、まず③についてはA群の他に6群を確認し、その中にA群出身のオスザル10頭を認めた。次に①についてであるが、A群よりの転出に関して、(a)A群で生まれた3.5才以上のオスは10/14が転出しており、4.5才を頂点に全て6才以下である、(b)A群へ転入した個体も3/8が転出している、(c)個体識別当時4.5才以上だったオスは全て転出してしまっている、(d)1位のオスも9年間に4匹が次々と転出している、ことから(A)全てのオスがいつかはその生まれた群れを去ること、(B)オトナになって転入して来たオスもまた転出していくことが推察される。転出のしかたについては(a)何匹かが相次

いで転出することが多く、ムレ内外の他のサルとの関係で転出することが考えられ、(b)ワカモノとオトナで転出のしかたが違ふこと、すなわちワカモノでは、(i)弱いものがより早く、(ii)転出入を短期間に何度かくりかえしてから(iii)他のムレにいる顔見知りのオスを頼って、転出するが、オトナではそうでないことが明らかになった。その中で4.5才前後という時期が不安定な移行期として再確認された。しかしまだオスニホンザルの一生として記述するには資料不足である、②については、資料を集めたのみで、まだ分析を行っていない。

## ニホンザルの発達段階

乗 越 皓 司 (大阪市大・理・生物)

1970年10月29日にシンポジウム「ニホンザルの発達段階」が開かれ、研究所内外の研究者たちと意見の交換を行った。

その結果、ニホンザルの幼時期における社会的、肉体的発達の critical point は生後5週目、12週目、および21週目あたりであることが明らかにされた。

また、ニホンザルの怒りや恐れなどの excitement の社会的成長にともなう発達の研究をするための方法論を検討した。

その結果、表情や音声などの情動表出を記録し、分析することは、ビデオコーダーを使用することにより可能であるが、スロー・スピードやコマ送りの操作を使いモニターする必要があることがわかった。

## ニホンザル母一子のコミュニケーションパターン (その母一子関係の発達を通じて)

川 辺 寿美子 (大阪市大・理・生物)

目的：ニホンザルの社会構造に関する研究は、各地の群れについて、かなりなされておられ、いろいろな現象が明らかにされた。彼らの群れが、1つには血縁を中心に成りたっており、一方では、オスグループが独自に順位をもち、群れの統率に役立っているという事実などについて、さらにその成因をさぐっていくと、彼ら個々の生い立ち、すなわち個体の発達が1つの重要な鍵をにぎっていると考えられる。

発達に影響を与えらると思えられる、後天的な環境要因の中で、アカンボウ期から幼児期にかけて、もっとも重要な影響を与えるるのは、母親であるという仮定のもとに、これまで、母親のないアカンボウ(隔離飼育)およびフィールドでの母親とアカンボウの行動・音声を中心